

(2) 学術交流施設新営事業

ア 効果等の把握に関して得られた成果

C 大学学術交流施設新営事業は、1)世界諸地域の言語・文化・社会に関する学際的かつ先進的な研究拠点及び地域・社会との連携強化を推進する拠点の整備により、国際交流を重視した教育・研究機能の充実・発展を図ること、2)国際社会の中で、世界中の言語・文化に精通する本学を拠点とし、留学生を含めた在日外国人との文化交流や生活支援サービス等の社会貢献事業を実現し、地域との連携により、国際色豊かな地域特性を活かしたまちづくりを推進することを目的として実施され、平成22年1月に完成した（事業の詳細は参考資料参照）。

以下に示す効果発現過程の中で、定量的なデータの入手が可能であった指標をみると、留学生数及び交換留学生数がそれぞれ増加するという効果は確認できたものの、これ以外に施設整備効果を示す特筆すべきデータは入手できず、施設担当部局において、施設整備がもたらす教育研究上の効果を定量的に把握できていない状況であった。

今後の施設整備では、計画段階において、施設整備による教育研究上の目標水準と目標を管理する定量的な指標を設定するとともに、完成後、教育研究上の効果を確認できるデータを測定していくことが望ましいといえる。

イ 施設概要

(ア) 建物規模・工事費

構造	: SR2
建築面積	: 1,230 m ²
延床面積	: 2,570 m ²
工事費	: 1,276,488 千円

(イ) 主要用途

大講堂、共同研究スペース、コミュニケーションスペース

(ウ) スタッフ

施設管理課職員3名、同時通訳スタッフ（修士課程の大学院生）、留学生支援スタッフ、軽食コーナースタッフ

ウ 教育研究上の背景

C 大学の伝統である国際交流を重視した教育研究機能を充実、発展させるため、留学生を含めた在日外国人との文化交流の拠点及び地域・社会との連携を強化する拠点を整備する必要があった。

エ 施設整備の課題とその短期的アウトカム指標

(ア) 教育

なし

(イ) 研究

なし

(ウ) 地域貢献

- ・留学生を含めた国際交流の拠点として、国際的学術研究・市民講座等を開催するためには、既存の講堂ではスペースが狭く、収容人員 500 人規模の大規模交流施設が必要であった。また多言語で展開される国際会議、オープンアカデミー等において、音響・通訳設備の確保が課題となっていた。そこで、収容人員 501 人＋車椅子スペース 3 の大講堂を整備し、同時通訳レシーバーを約 500 席分用意した。(国際化推進と共通)
- ・留学生を含めた学生や教員・研究者に加え、地域住民など誰もが自由に使い、異文化交流を行えるコミュニケーションスペースの確保が課題となっていた。そこで、多目的スペースや軽食コーナーと一体となったコミュニケーションスペースを整備した。(国際化推進と共通)
- ・この結果、地域に対する大学 PR 機会が増加した。短期的アウトカム指標としては、大講堂など当該施設の外部貸出件数のデータを収集した。平成 22 年度は 13 件であったが、平成 23 年度は 17 件と前年比増加した。平成 24 年度については、12 月末までの時点で 14 件である。また、外部貸出により得られた収入金額は、平成 22 年度 753 千円、平成 23 年度 1,028 千円であった。平成 24 年度は 12 月末までの時点で 661 千円となっている。
- ・地域貢献への寄与が見込まれるもう一つの効果として、地域との交流機会の増加がある。アウトカム指標として、シンポジウム開催件数、公開講座実施回数、施設の稼働率が考えられるが、C 大学ではこれらのデータを把握しておらず、施設整備の効果について確認することはできなかった。

(エ) 国際化推進

- ・世界諸地域の言語・文化・社会に関する学際的かつ先進的な研究拠点及び地域・社会との連携を強化し共同研究等を推進するスペースを確保することが課題となっていた。そのため、競争的スペースとしてのプロジェクトスペースを整備した。
- ・この結果、留学生数は平成 21 年度 579 人から平成 22 年度 609 人に、交換留学生数は平成 21 年度 76 人から平成 22 年度 96 人に増加した。
- ・このほか、具体的なデータは収集できなかったが、海外との交流機会の増加、国際化に対応できる学生、教員の増加についても短期的アウトカムとして活用

可能と考えられる。

オ 施設整備の効果指標に対する大学の意見

- ・地域住民からの認知度は高まっているが、一方で地域企業への周知は不十分であるため、地域企業からの求人率には反映されていない。
- ・当施設は外国人向けに特化した施設ではないため、整備の結果と外国人留学生・講師の満足度との相関性は低いものと考えている。
- ・施設の利用率や稼働率のデータについては、外部への貸し出しについては利用料を徴収しているので別の部署へ調査を依頼すれば把握できるが、講義などを含めた全体のものまでは、通常管理はしていない。
- ・学園祭にて行う外国語劇は盛況ではあるものの、具体的な動員数は計測していない。
- ・入学希望者が増えているという話は聞かない。
- ・留学生の定員が増えているわけではないので、施設整備によって留学生全体の数が増えたかどうかはわからない。
- ・1年生は TOEIC 受験が必須であるが、結果の統計等とはとっていない。
- ・プロジェクトスペースは現状、当初目的である共同研究等での利用はされておらず、効果の検証の指標と見ることは難しい。

カ C 大学学術交流施設新営事業の効果発現過程（別表）

C大学学術交流施設新営事業の効果発現シナリオ

